



# SPL(殺破狼) / 狼よ静かに死ね

2006(平成18)年3月12日鑑賞(ユウラク座)



監督=ウィルソン・イップ/出演=ドニー・イェン/サモ・ハン/サイモン・ヤム/ウー・ジン/リウ・カイ・チー/ダニー・サマー/ケン・チャン (メディア・スーツ配給/2005年香港映画/93分)

……タイ映画『マッハ!』(03年)の刺激を受けて(?),『男たちの挽歌』シリーズ以来久しぶりに本格的香港アクション映画が登場した! アクション映画でもやはり泣かせるストーリーがあった方がベター。スクリーン上で観せる男たちの熱い闘いは迫力いっぱいだが、同時にそこには父と子の「人情話」がタツプリ盛り込まれているうえ、その邦題どおり、男たちには悲しい結末が……。男の美学を貫くことはやっぱりしんどいネ……。

## 殺破狼 (シャ・ポー・ラン= SPL) とは?

殺破狼とは、中国占星術で反乱を司る“七殺”“破軍”“貧狼”の3つの星を意味するとのこと。そう言われても何のことかよくわからないが、はっきり言ってこの原題よりも『狼よ静かに死ね』という邦題の方がこの映画にはピッタリ。

舞台は1994年の香港。本土返還前で、まだ中国共産党色は全くなく、高層ビルが林立する香港の夜の世界を牛耳っているのはマフィアのボスのポー(サモ・ハン)。日本のヤクザ組織は、山口組でもかなり「集団指導体制」となっているが、この映画ではストーリーをシンプルにする意味もあってか、ボスはポー1人だけで、側近や中間管理職は誰もおらず、その下にいるのは大勢の若手のチンピラばかり。夜の12時を過ぎると、香港のまちはポー配下の若者たちでいっぱいという設定だが、ホントはそれはごく一部だけ……? そうでなければ、香港への観光旅行に恐くて行けないことになってしまうし、私が香港旅行に行った1997年6月には香港の治安は良好だった……?

## ボスは貫禄タップリ

映画の冒頭はいきなりの車の激突シーン。そして手錠姿ながら上品な(?)ネクタイ・スーツ姿のポーが貫禄タップリに歩くシーンが……。このシーンの意味は直後に種明かしされるが、それはチャン刑事(サイモン・ヤム)にとって何とも屈辱的なもの。やっとならぬ犯罪を立証できる証人が確保できたと思ったのに、その証人を乗せた車の横っ腹に車が激突してきたうえ、ポーの雇う殺し屋ジェット(ウー・ジン)によって瀕死状態の証人の首がかっ切られることに。そのため、ポーは証拠不十分で釈放されることに……。

他方、チャン刑事の負傷は大したことはなかったものの、その検査の中で脳の悪性腫瘍が判明。死亡した証人の一人娘を引き取り養女として育てながら、警察官として残りの人生すべての執念をポー逮捕に燃やすチャン刑事だったが……。

## チャンのポー逮捕への執念は……?

それから3年。チャン刑事の、脳の悪性腫瘍の進行とともに、ポー追及の手は手荒くなっていき、今では上司の制止もどこ吹く風……。そしていよいよ自己の肉体的限界を悟ったチャンは自ら退職を決めたが、「退職日までは俺の責任」とばかりにポー逮捕に最後の執念を……。そんなチャンのチームを支える部下たちは、ワー(リウ・カイ・チー)、サム(ダニー・サマー)、ロク(ケン・チャン)の3人。既にチャンの後任のマー(ドニー・イェン)も赴任していたが、あくまで彼ら3人はチャンのチームとしての結束を確認し合っている様子。そんなチャンのチームは、「最後の暴れ」とばかり、ポーの麻薬密売アジトを急襲してその壊滅作戦を実行し、ヤクを没収、そして現ナマも……。しかしチャンのチームが受けたその報復は、チャン刑事が「俺が守ってやるから大丈夫だ」と言って送り出し、潜入捜査に従事させていた部下が死体として発見されたこと。

## チャンチームは精鋭揃いだが……

部下の死を哀しむそんなチャンチームにもたらされたのは、たまたま殺害シーンをビデオカメラに撮っていたというオタク少年からの通報と証拠品の提供。そのビデオテープには、ゴルフクラブで捜査官の頭を打ちつけるポーの姿と、血まみれで立ち上

がった捜査官の額を拳銃で撃ち抜く若い組員の姿がはっきりと……。これはポー逮捕を可能とする重大な証拠だが、これでは殺人罪にはできない……。そこでチャン刑事がとった決断は、何と証拠の捏造！つまりビデオテープの後半を消してしまおうというわけだ。するとその辻褃合わせのためにやらなければならないのは、第1に少年の口裏合わせ、そして第2に射殺実行犯である組員の抹殺……。そう考えたチャンチームの行動は素早いものだった……。しかし、チャン刑事の後任としてやって来た、かつて凶悪な殺人犯を素手で殴りつけて脳障害を負わせたという署内でも有名な武闘派熱血刑事のマーは、そんな違法捜査を認めるのだろうか……？

## 香港アクション映画の系譜と『マッハ！』越えは……？

この映画のパンフレットには、ブルース・リー、ジャッキー・チェン、ジェット・リーそしてドニー・イエンと続く香港アクション映画の系譜が紹介されている。最近の大ヒットは80年代中盤～90年代中盤のジョン・ウー監督の『男たちの挽歌』や『狼／男たちの挽歌最終章』だが、近時はタイのアクション映画が急成長してきている。中でも日本でも大ヒットした『マッハ！』（03年）は香港アクション映画にも大きな影響を与えたようで、この『SPL（殺破狼）／狼よ静かに死ね』が目指したアクションは『マッハ！』越え……？ 中国武道とは全く違うタイ式キックボクシングとムエタイは、日本でもおなじみのスタイルですごくカッコいいものだが、この『SPL（殺破狼）／狼よ静かに死ね』でのアクションは、殺し屋ジェットのナイフ使いの技が面白いというえ、重量級のポーに挑む中量級のマーのスピードや多彩な技が見モノ。したがってそこには軽・中量級の試合では見ることのできない迫力が……。

## 大切なのは「必然性」

また見逃してならないのは、そのアクションを生み出すストーリーの必然性……。『網走番外地』シリーズの高倉健や『男の紋章』シリーズの高橋英樹らと同じように、組織（警察）vs. 組織（マフィア）の対決の中で、やむにやまれず最後の闘いに臨む男の姿、この必然性がカッコいいわけだ。それを「決める」ためには、「男」には闘わなければならないときがある」という謳い文句がピッタリはまるような脚本づくりが不可欠だが、この映画の出来を見ると、『狼よ静かに死ね』という邦題もピッタリくる立派な出来ばえ……。？

## 残忍なボスの心の裏側は？

ナイフ使いのジェットは殺し屋としての能力だけが強調されているが、優に100kgを超すと思われるポーは、マフィアのボスとして残忍な性格の持ち主だということはわかるものの、いつもきちんと決めたネクタイ・スーツスタイルはもちろん、その物腰も一見柔らかかで上品そのもの。そのうえ、2度目の流産をした妻（愛人？）を思いやる姿や、その後生まれてきたはじめての子供に対する可愛がりよう（親バカぶり）を覗いていると、やさしい父親そのもの……？ この映画は、このポーの父親ぶりをはじめとして、アクションの合間に、それぞれの父子物語がうまく挿入されているから、それにも要注目……。

## それぞれの父子物語は……？

詳しくは紹介しないが、そもそもチャン刑事が、死亡した証人の娘を養女として育てているというストーリーからして、えらく人情的……？ チャンチームのサムも、離婚後娘と会えるのは年1回だけで、今日がその日。ポー逮捕の執念とは別にサムが父親として示すやさしさと娘との語らいは……？ さらにマーも実はオヤジが警察官。手と足に20発の弾を撃ち込まれ、苦しみながら死んでいったオヤジの遺言とは……？

93分の映画の中で、実にうまくこれら父子物語の人情話を入れこんだものと感心するが、それらの物語の結末はすべて悲しいものに……。

## ケータイに注目！

そして、1980年代の『男たちの挽歌』と大きく違うのは、今ドキの映画らしくここではケータイが大きな役割を果たしていること。チャンチームのメンバーたちのケータイに次々とかかってくる呼び出し音の相手は……？ そして大舞台に臨み、命がけの勝負をしているポーのケータイにかかってくるのは……？ 登場人物それぞれが持っているケータイが大切な小道具として使われているから、それにも要注目だ。

## すでい前哨戦、マー vs. 殺し屋ジェット

チャンチームの仲間たちが次々と殺される中、何の対応もできない警察の官僚的体質に絶望し、ついにはあれほど愛していた警察官という仕事に決別したマーは、とうと

う拳銃と警察手帳を返還……。したがって、何を武器として単身ポーの本拠地に乗り込んでいくのかなと思っていたら、ナイフを構えて迎えるジェットを前にマーが取り出したのは特殊警棒。これは日本の警察官が所持している木製の警棒ではなく、長さもその2倍はあり、刃はついていないものの上部は鉄製で、ナイフの刃でも受け止めることができるもの。まあ、刃のついていない刀と考えればいっしょうか。

このマーの特殊警棒と殺し屋ジェットのナイフとの映画史上はじめての攻防戦はすごく見ごたえのあるもの。ここを突破しなければボスの元へたどり着けないのだから、マーが勝つに違いないと予測しながらも、その迫力ある前哨戦に大興奮……。

### さらにド迫力の決勝戦、マー vs. ポー

メインイベントともいえるべき、マー vs. ポーの闘いは、互いに何の武器も持たず、また助っ人なしの1対1の肉弾戦。そのうえウエイト差を無視した中量級 vs. 重量級の闘いだし、パンチやキックはもちろん投げ技や関節技何でもありの勝負だから、その迫力はすごいもの。K-1の闘いもたまには曙戦のような期待外れの試合もあるが、一瞬のKOシーンが多いため目を離すことができず、大半の試合は面白いが、このK-1の面白さに馴れたあなたもきっとこの決勝戦のド迫力にはビックリするはずだ……。タックル、三段蹴り、腕ひしぎ逆十字固めで攻め立て、そして中量級のマーが重量級のポーをガラス棚に叩きつけたところでノックアウトとなりジ・エンド……。しかしこんな投げ技だけで本当に人間が死んでしまうの……？ マーは安心して勝利の美酒を飲もうとして大丈夫なの……？ と思っていると案の定……？

### ラストはもう少し工夫を……？

チャン刑事による証拠捏造工作の発覚と、その後の行動を観ていると、映画の後半は主役がチャン刑事からマーに完全に移っていることがよくわかる。そして、もちろん脳の悪性腫瘍はかなり進行しているはず。そうするとチャン刑事の生命は……？

また、これ以上ネタバレはできないが、決勝戦を闘ったマーとポーの闘いの後は……？ さらにチャンチームの3人の刑事たちは次々とジェットのナイフで殺されたが、そのジェットもマーとの闘いに敗れて既に死亡。残った主人公たちの行く末はさて……？ 私としては、このラストにもう少し工夫がほしかったと思うのだが……。

2006(平成18)年3月13日記